

いま私達に出来る事 色彩と認知症・高齢者との向き合い方

一般社団法人 日本色彩環境福祉協会
〒150-0001 東京都渋谷神宮前 6-25-8-810

助成事業の概要

2012年より毎年11月16日が「いい色・色彩福祉の日」と記念日認定され、その日を記念し募集テーマを設定し色彩コラージュの公募展、展示覧会を東京の高齢者施設や京都の大学で開催し、「色の集いば」の開催を通じて近隣の方々との交流や高齢者施設で入居者とのコミュニケーションを促進して色彩交流法を使って高齢者の孤立解消、脳の活性化トレーニングなどの提案を行ってきましたが、コロナ禍で高齢者施設・病院・学校への立ち入りまでもが規制され、ボランティア活動も中断される中、今後の活動の方向性や、高齢者のサポートの仕方を見直す意味も含め大阪大学大学院人間科学研究科臨床死生学・老年行動学研究分野教授の佐藤眞一先生をお招きして講演会「認知症の人の心の中はどうなっているのか？」を2021年11月13日に開催。色彩福祉士として活動リーダーの各地の支部長・副支部長・広報との交流と親睦と共に、認知症、高齢者への理解を深め今後の活動に活かすべく具体的な活動についての会議を開き今後の活動に繋げる。

事業の成果

今回は既に多くの方がご存じの「認知症とは」という話ではなく認知症の方と介護する家族の心のすれ違いや苦しみについて認知症の方の思いをくみ本人の状態を楽に出来れば介護する側も楽になるのではという心理学の面から認知症の方と介護者の心理について「認知症の人の心の中はどう

なっているのか？」というタイトルで11月13日10時から12時まで質疑応答を含め講演して頂きました。

初めてのZoom使用も含めた講演会でしたが、佐藤先生の話がわかりやすく、具体例を出して説明してくださったので、Zoom参加者からもたくさんの感想や意見が寄せられ、今後の活動へのZoomの使用方法等も含め学びと励みが有りました。

「認知症の介護で1番苦しいのは何ですか？」の問いで「この介護がいつまで続くのか分からない事が苦しい」という答えの中にある、介護と同時に介護の終わりを望んでしまっている自分を責めると言う2重の苦しみがあるという事を知り、特に思いやりから発する相手をケアする気持ちだが、いつしか相手を支配下に置くコントロールに変わってしまうという話では色彩福祉士として認知症の方だけでなくその介護者との接し方にも大きな気付きと指針が有りました。

また、介護のために雑然としてしまった部屋の色彩を変えただけで認知症の方に笑顔が浮かび、介護者の気持ちが和らいだと言う事例では、色彩福祉士としての今後の活動や、アプローチの仕方などに大きな学びが有りました。

午後13時30分から行われた支部長会議では「いま私達に出来る事、色彩と認知症・高齢者との向き合い方」をテーマに、佐藤先生の講演の内容も含め今後の活動に向けての活発な意見の交換ができました。その中でも各支部の活動報告と共に交流と親睦が深まり今後、よりスムーズで活発な活動が期待されます。今後SNSやZoomを使

用して会員相互の情報交換に活用してより良い介護と認知症予防や介護者のサポートに繋げる方向性が明確になりました。

■ 成果の広報・公表

今回の講演会の概要や支部長会議について協会季刊誌43号のカラー見開きページに記載し、1,500部を印刷して全会員、協会関係者、学校、色彩コラージュ応募者等へ1月末から配送いたしました。また、佐藤先生の研究グループが開発した認知症のテストをするのが難しい状況や嫌がる人に対しても有効な知能テストをしない日常の自由な会話で認知検査が出来るCANDyの評価シートと、どんな会話や質問をすれば良いのか分からないと言う質問があったので会話例も含めた使用マニュアルを無料で誰でもダウンロードできるURLとRQコードを掲載しました。

関東甲信越支部では3月10日に福祉活動を拡げるべく「色彩コラージュセミナー」を開催し、政府が推奨する認知症施策推進の為にオレンジカフェやデイサービスでの実際の講座の進め方を学ぶカラーセラピーワークを開催するチラシを全会員に送付しました。

■ 今後の展開

コロナ禍で中断してしまったオレンジカフェ等へのアプローチも含め、「色の集いば」の開催を目指し、会員相互の情報・交流をSNSやZoomを活用して色彩福祉士・色彩福祉アドバイザー・認知症色彩ケアスタッフ・カラーセラピスト全会員と共有し、誰もが資格を活かして活動出来るよう実践講座を支部毎に開催します。

「認知症施策推進の為に色彩交流法」を用いて高齢者・認知症の方の孤立解消・脳の活性化トレーニング・ストレス緩和等、色彩を介してコミュニ

ケーションを取りながら行い、認知症の方、その家族・介護者の方々と真摯に向き合い、不安やストレスを少しでも軽減できるようコントロールではない本当のケアを目指しより安全な予防、改善に務め心の安らぎと楽しかったの声と笑顔を多くの人に広めていきたいと思えます。